

# 「裏庭モスク」から「統合・文化・教育センター」へ ——ドイツの都市におけるイスラーム団体VIKZの黎明期と現在——

石川 真作

## 要 約

ドイツの一都市におけるトルコ系イスラーム団体は、自発的結社としてトルコ系移民の社会への適応に一定の貢献をしてきた。本稿では、そのひとつであるVIKZの、ドイツの一都市における1970年代から現在までの来歴をたどりながら、その中間集団としての役割の変化を論ずる。イスラーム団体は、初期には移民の信仰実践のためのインフラ提供を担ったが、定住化の進行に伴って文化的コンフリクトの対象となり、移民の統合が社会的課題となった現在では統合への貢献が期待されている。

キーワード：ドイツ トルコ系移民 イスラーム 自発的結社 社会的統合 並行社会  
エスニシティ 教育 スレイマンジュ

### 1. はじめに

ドイツには現在、約250万人のトルコ系住民が居住している。彼らの流入は1961年に結ばれた2国間協定に基づく外国人労働者雇用政策によってはじまった。1970年代以降彼らは家族を呼び寄せて定住化し、移民となって現在に至っている<sup>1</sup>。

彼らはこれまでに、モスクの建立および維持、コーラン教室の主催その他日常の宗教活動を目的としたイスラーム団体を多数形成してきた。こうしたイスラーム団体は、自発的結社の一形態として理解できる。移民のホスト社会への参入に際して自発的結社の果たす役割は大きい。自発的結社は個人としてホスト社会へ移動してくる移民たちを結びつけ、ホスト社会との関係を取り結ぶ中間集団としての役割を果たす。その目的は様々であり、ホスト社会への適応を図るとともに、政治的な利益を追求し、また、文化を維持する役割を持つ。

本稿では、ドイツ在住トルコ系移民の形成す

るイスラーム団体のうち、早い時期から活動してきた「イスラーム文化センター連合Verband der islamischen Kulturzentren e.V. (以下VIKZ)」による地域における活動に着目し、通時的に検討を加えることで、ドイツの地域社会とイスラーム団体の関係の変化を捉える。そこから、ホスト社会と移民の関係の変遷の中での中間集団としての意味づけの変化を論じる。

ドイツにおけるイスラーム団体は、1973年頃から各地で設立され、1980年前後にそれらを組織化する上部団体が設立された<sup>2</sup>。しかし一部に、早くから組織化を進めた団体が存在する。1968年にトルコ人連合Türkenbundの名で設立され、1973年に、スレイマン主義者(Süleymançılar: 以下、慣用表現にしたがってスレイマンジュとする)の優越的状況下で改名されたのが、VIKZである(Gür 1993, 49-50)。

先行研究からVIKZの概要を記す。VIKZは、イスラーム文化センター-Islamische Kulturzentren (以下IKZ)と呼ばれる諸団体の上部団体である。傘下のIKZは300を数え<sup>3</sup>、また、90年代初頭の調査では会員が約2万人とさ

れている (Zentrum für Türkeistudien 1994, 383)。1980年にイスラーム・コミュニティとして正式に認可された (Güner 1991, 344; Spuler-Stegemann 1998, 139)。

スレイマン主義運動とは、ナクシュバンディ教団のシャイフであったスレイマン・ヒルミー・チュナハン Süleyman Hilmi Tunahan (1888-1959) を始祖とし、神秘主義的色彩が強く、シーア派的要素が結びついた運動である (Gölpınarlı 1997, 222-223; Jonker 2005, 172 など)。トルコ共和国の成立後に神秘主義教団の活動が禁止されて以降、クルアーン教室を中心に思想の継承運動を行い (Jonker 2005, 80 など)、トルコ政府には反社会的と見なされてきた (Gür 1993, 52) <sup>4</sup>。

ドイツにイスラームの宗教生活のためのインフラがほぼ皆無であった1960年代から70年代初頭、イスラーム労働者のインフラ構築の動きにノウハウを与えたのが、スレイマンジュなどのイスラーム勢力であった。彼らにとっては、世俗主義のトルコにおいて活動が制限されている中、安定的に勢力を拡張できる場がヨーロッパであった。そうしてトルコにおけるイスラームをめぐる政治の構図がヨーロッパに投影され、そのことがホスト社会に知られるにつれ、一部では警戒の目が向けられるようになった。(Schiffauer 2007, 71-76; 内藤 1996 195-196)。

1980年代から90年代、保守系であるキリスト教民主同盟 (以下CDU) 長期政権下のドイツでは非移民国としての自己認識が貫かれ、各地のイスラーム団体は周辺社会とあまり関係を結ばない傾向があった。90年代末期、革新系である社会民主党 (以下SPD) /緑の党連立政権への交代を経て、移民受け入れに政策がシフトしていくにつれ、移民の経済的社会的セグレーションが政治課題になった。

ドイツで移民法が制定されたのは2004年である。法制化を経た現在は、移民の社会への「統合」への取り組みが課題となっているが、20世紀末までの40年間近くにわたって彼らの社会的な位置づけは不安定であった。その間にドイツで育った世代には、移民受け入れの体勢が整わないホスト社会と、「帰国神話」が捨てきれな

い親世代に挟まれて、学歴や資格取得が進まず、社会的達成が難しい状況に置かれる者が多く現れた。移民集住地区では近年もそのような傾向が見られる。そうした要因もあってか、2007年の統計では、国籍別に見て、ドイツ人の失業率が9.3%であったのに対して、外国人は20.3%という結果が出ている<sup>5</sup>。ハンセンは、西ヨーロッパ主要国に共通するこのような状況を「失業の人種化」と表現している (Hansen 2003)。

そうした中ドイツでは、移民が社会から孤立した独自の社会空間を形成している状況をあらわす「並行社会Parallelgesellschaft」という用語が用いられるようになった<sup>6</sup>。「並行社会」とは、このような社会経済的セグレーションが主たる要因となり、貧困と文化的隔離の中にある移民の「コミュニティ」が、移民集住地区に形成される、というイメージを喚起させる概念である。そして、「閉じられた」イスラーム団体は、「並行社会」の可視的な象徴として捉えられ、特に保守派からは、移民の統合を妨げるものとして問題視された。現在、移民の「統合」が重要な政治課題となっている背景にはこのような状況がある<sup>7</sup>。

調査地のデュースブルク (Duisburg) 市は、人口48万8,218人 (2010年) を擁するルール工業地帯の中核をなす工業都市のひとつであり、かつてはライン川とルール川の合流点に構築された世界最大級の河川港から搬入される鉄鉱石と、市内で産出する石炭を利用した鉄鋼業で栄えていた。そのため、多くの外国人労働者 (ガストアルバイター) が居住することになった。しかし産業構造が変化する中、同市をめぐる環境は非常に厳しい。失業率は2005年の初頭には19%近くに達した。都市構造の変革に取り組んだ結果持ち直したが、それでも2011年の失業率は12.4%と、全国平均の7.6%を大きく上回っている。失業者3万人あまりのうち外国籍が8,300人であり、失業者の27.5%を占める。

外国人人口は2008年現在で7万4,534人、全人口の約15%という割合は全国平均を大きく上回っている。さらにドイツ国籍を含む「移民」は15万9,004人を数える。全人口に占めるトルコ系住民の割合は約13%である。外国人人口がもっ

とも多い街区は、ミッテ (Mitte) 市区のホッフフェルト (Hochfeld) 街区、次いで外国人の多い街区は、ハンボルン (Hamborn) 市区のマルクスロー (Marxloh) 街区であるが、同時にこれらの街区は、低所得者の多い地域でもある。

1996年のデュースブルク市の調査によると、市内のイスラーム関連団体は40ヶ所となっている (Stadt Duisburg 1996: 19)。現在も、同程度の団体が活動していると思われる。以下では、そのうちVIKZに属する団体の活動の足跡と現状を、デュースブルク市文書館に保存されている新聞による報道と現地調査から検証し、「並行社会」と評されるイスラーム団体と地域との関係の一側面を照射する<sup>8</sup>。

「並行社会」という理念は、素朴な多文化主義的志向の中で生ずる、自文化空間の形成によるコミュニティの閉鎖性を問題視する視点を持っており、そこでは文化的統合の難しさが語られる。そのような視点からは、自発的結社が移民の移住先社会への適応に寄与するにあたり、自文化の維持と移住先社会への統合は両立するのか、という問題設定が可能となるだろう。

## 2. デュースブルク最初のモスクとその後

1972年12月23日の新ルール新聞 *Neue Ruhr Zeitung* (以下NRZ) に、「デュースブルクのトルコ人たちが、宗教センターを求めている」という記事が見られる<sup>9</sup>。副題に「モハメッド教の (Mohammedanischen) 祭日には礼拝室が小さすぎる」と掲げられている。

記事の内容は、労働者寄宿寮管理会社に約300名のトルコ人が礼拝所設置を嘆願したというものである。「キリスト教のクリスマスに匹敵するお祭りである“ラマダン”」には、寄宿寮は「デュースブルクのメッカに姿を変え」、「娯楽室や廊下、給湯室などでアラーへの呼びかけが行われる」とある。これらの記述や写真からは、この頃はイスラームに対する認知もインフラ整備もほとんど期待できなかったであろう雰囲気が伝わってくる。この嘆願に対して、会社側は「道義的支援」は行うが資金援助については確約できないとしており、資金面では移民労働者の自助で賄われてきた歴史が反映して

いる。

同記事は、当時のトルコ系労働者の宗教的姿勢にも言及している。トルコにおける「明白な自由主義化」にも関わらず、「ドイツにおいても、多くのムスリムが“非常に宗教的”であった。ラマダンの説明とともに、縦抗や高炉での重労働に従事するにもかかわらず、多くが「水を飲み込んでしまわないために、歯を磨くのさえ避ける」ほど「厳格」であると、寮長が「率直な敬意」を示していた。40~50%ほどが30日間の断食期間を厳格に過ごし、断食時以外でも、時間の許す限り1日5回の礼拝を行うために30人程が礼拝室にやってくるという。これらの数字の割合から、デュースブルクのムスリムのうち3~400人ほどが毎日、ラマダン期間には12,000~13,000人ほどが宗教的实践を行っている」と推測している。

このような要求を受けてか、翌73年には、デュースブルクで最初のモスク開設を知らせる記事が現れる<sup>10</sup>。このモスクは北部マルクスロー Marxloh 地区に開設された。「ほとんど人知れず、我等がトルコの同胞達のためにモスクを併設した大きなコミュニケーションセンターが、マルクスローに誕生した」という書き出しには、一定の好意が感じられる。

開設にあたっては、労組、住宅会社、鉱山会社の援助があり、購買組合の建物が転用された。住宅会社の「寛大さ」により家賃は格安であったという。モスクには子供たち向けの教室や、談話室、地下倉庫、トイレなどが併設されていた。鉱山会社が周辺住民に調査をしたところ特に異論はなく、宗教的文化的なことに関しては口出ししない、という鉱山会社の雇用局長の見解も記されている。

同73年秋に組まれたNRZの特集、「ライン河畔のトルコ人たち——マルクスローの事例——」には、開設からほぼ半年後の上記モスクの姿が描かれている<sup>11</sup>。ラマダンの際、「故郷のトルコでは、人々はあまり働かず、休息をとる」が、「工場ではそのような配慮は払われず」、「労働事故の件数が増える」、とある。記事には黎明期のイスラーム団体の様子が詳しく記される。モスクには3名のホジャ (Hoca=

イマーム：礼拝の指導者）がおり、子供たち向けのクルアーン教室が開かれ、子供たちが男女別に「厳しく分けられて」学んでいた。最低でも120人の子供たちが、日々の礼拝に来ており、女の子はスカーフを、男の子は手製のつば無し帽をかぶっていた。このモスクは、周辺自治体や市南部など、広い範囲から人々を集めており、金曜日には、200人が礼拝に訪れていた。一方はす向かいには「独身トルコ人の欲求を満たす」ポルノ映画館があり、ある者は「“人妻レポート”に5マルクの入場料を払い、他の者は彼らのモスクの改装を援助」する、といった皮肉っぽい記述がある。

これらの記事に記されたモスクは、ウルジャミー（Ulucami）と名づけられていた。山本の1992年の調査にも記されているとおり（山本1994, 47）、同モスクはVIKZの所属であり、当初からスレイマンジュとの関係があったものと考えられる。記事の内容にも、ムスリム子女の教育（クルアーン教室）を重視するスレイマンジュの傾向が現れている。1996年のデュースブルク市の調査で確認されたIKZ系の団体は8ヶ所であったが、うち設立年がわかっている6ヶ所中、5ヶ所が70年代の設立である。ウルジャミーと、市中部ホッフフェルトHochfeld地区にあるオスマンル・ジャミーOsmanli Camiiの2ヶ所は1973年の設立であった（Stadt Duisburg 1996.,7）。1977年のライニッシュェ・ポストRheinische Post（以下、RP）には、別のIKZ系モスクに関する記述も見える<sup>12</sup>。

同じ77年の西ドイツ一般新聞Westdeutsche Allgemeine Zeitung（以下、WAZ）には、その後のウルジャミーの姿が描かれている<sup>13</sup>。「裏庭から入って小さな階段を上ると、靴やブーツやサンダルで一杯の下駄箱があり、廊下を進むと、「喫茶室とその廊下で分けられた、絨毯が敷き詰められた180㎡の大きな」礼拝室があった。描写には、内部を見ることも珍しかった「異文化」としてのモスクに対する好奇心が透けて見える。壁に「金庫」があり、そこに会員が毎月入れる喜捨から、「月600マルクの家賃が支払われる」。また、礼拝室の後ろの部分にはカーテンで仕切られた女性の礼拝空間があり、

それとは別に少女達が週に4回3時間のクルアーン教室を受ける部屋がある、といった点も記者の関心を引いたようだ。また、浄めのための洗面台や、トルコ式のトイレなどにも触れられている。記事の最後は、案内をした人物が「誇らしげに」語った「ここには一度も警察は来ていない。我々はアルコールを飲まない。ここでは礼拝をするだけだ」という言葉で締められている。

80年代に入ると様相が変わる。81年9月の記事の見出しには「隣人はコーランの祈禱を聞きたくない」「イスラーム文化センターが移転しなければならない」とある<sup>14</sup>。ホッフフェルトのIKZが移転することになったが、新しい場所の周辺住民が、市に反対の申し入れをし、建設局が一時差し止めを命じたというのである。住民は、金曜礼拝に150～200人くらい集まることによる騒音を懸念し、移転の阻止に向けて署名活動を始めると書かれている。しかし、「住宅地で同じような形の教会施設は通常見られる」ため、「全面的な禁止は見込めず」、一定の条件で折り合うだろうとの見通しが示されている。

81年前後は、既に外国人の定住化が明らかになり、多くのイスラーム団体が設立され、上部団体の進出とイスラーム団体の再編が活発に行われた時期である。翌年には、SPDからCDUへの政権交代と、それに伴う外国人帰国促進政策への転換が控えている。この記事からは、そういった状況下で、既にウルジャミー開設時のような牧歌的な反応は望めなくなっていたことがわかる。

また、IKZに特有な要素も指摘できる。IKZは1977年から78年にかけて、ドイツの諸官庁にイスラームをカトリック、プロテスタント両キリスト教会と同等の権利を持った「公式」の宗教として認め、同時に自らをその代表として認めるよう申し入れている。これに対して、世俗主義的なトルコ系団体やトルコ政府関係者によるネガティブ・キャンペーンが展開され、ドイツ労働組合連盟からも批判がなされた（Gür 1993, 52-54; Spuler-Stegemann 1998, 224）。ここでは、シャリーア以外の規範や法秩序を認めないいわゆる「原理主義」的な傾向や、ナクシ

ユバンディ教団の流れを汲むことを根拠としたトルコにおける「違法性」を指摘する言説がなされ、キリスト教会や経済界、政府などがIKZに対する疑念を抱くにいたった。以降、団体は外部に対して閉ざしがちになったという (Jonker 2005, 174)。これらの経緯から、デュースブルクにおいても、地域社会のIKZへの対応に変化が生じたと解釈することができる。その間、1980年にはIKZ (イスラーム文化センター) の連合として、VIKZ (イスラーム文化センター連合) が正式発足している。

1996年のデュースブルク市の調査報告書には、新ウル・ジャミー (Yeni Ulu Camii) というモスクが記載されているが、設立年が1973年とされている点から、ウルジャミーが移転したものと考えてよいだろう。それによると、会員数は200名、大人向けのクルアーン教室を週4回夕方に、6歳から16歳までを対象には毎日午後で開催しており、40名の生徒が参加していた。主要な活動目的は宗教教育にあるが、人手と場所の問題で活動継続が困難であるとされている<sup>15</sup>。ウルジャミーは、2009年現在もさらに別の場所に移って存続している。旧ウルジャミーの建物は、2007年時点ではポルマン中央モスク Pollman Merkez Camii<sup>16</sup>建設時の仮モスクとして使用されていたが、内部は老朽化が激しく、それだけに歴史的な場所という雰囲気が強く感じられた。

ドイツにおける一般的なモスクは、集合住宅の一室や工場関連施設の建物を利用して設置されている。外観からモスクと窺い知れるような要素は少なく、いつからかこのようなモスクは、「裏庭モスク (Hinterhof-Moscheen)」と称されるようになった。ウルジャミーはその典型ともいえる事例である。

Hinterhofとは、集合住宅の裏側の、道路に面していない部分やそこにある建物を指す。このような部分は日当たりが悪く不便で、一般的に物置や低所得者の住居といった認識がある。モスクには表通りに面しているものや、独立した建物を使用しているケースもあるが、このような呼び方が一般化してきたことには、ドイツ社会のイスラーム団体に対する認識が現れている

といえる。そこには、「並行社会」の可視的な実例として、集住、貧困、自言語使用、閉鎖的コミュニティといったイメージと結び付けられて形成された表象が見受けられる。しかし、ウルジャミーが設置された当初は、必ずしもそのようなネガティブな表象が与えられていたわけではないことが当時の報道からは伺える。一方で、イスラームに対する素朴な無知とも言えるような認識も垣間見られ、当時はこのような動きが「並行社会」として批判されるような状況につながるなどは想像されなかったであろう。表象の変化はドイツ社会とイスラームとの関係の変化を反映している。

現在、このような「裏庭モスク」の時代は終わりに近づいている。90年代後半以降、あちこちで丸屋根とミナレットを持ったモスクが建設されるとともに、多くのイスラーム団体が「開かれたモスク」を標榜し、見学者を受け入れるなど積極的な活動を展開している。ポルマン中央モスクはその典型的な例であり、このようなモスクは地域の文化的資産としての価値や、統合への寄与をアピールし、「並行社会」を助長するものではないことを強調している。

近年ではVIKZに属するモスクも、社会から隠れてひっそりと存在した「裏庭モスク」とは違ったあり方を見せるようになってきている。1996年の調査で確認された8ヶ所のIKZは、一部移転したが現在も存続しており、それらのひとつ、ヴァルスムWalsum市区にあるIKZの5階建ての大型モスク複合施設への建替え計画が、地域住民や教区教会の間で議論になっている<sup>17</sup>。そのことが記事に現れるのは2006年である。住民は「バチカンがすっぽり入る」などといい、また、「“裏口から”」「原理主義的なクルアーン教室」が行われるといった「疑念もある」という。VIKZ側の説明では、礼拝所のほかに、子供達の遊戯施設、学習や言語クラスのための教室、飲食施設と賃貸アパートを併設する予定であり、「ムスリムの統合に貢献する」ための計画であるという。

2008年の3月には、「モスク・ジャイアント」とあだ名されたこの建築計画に関して、全ての政党が批判的であるとの記事が出た<sup>18</sup>。ここで

は、VIKZの「保守的」とされる性質に対する疑念と、この計画がショッピングセンターや寄宿舎を含んだ大規模なものであることが問題とされている。ここに商業施設を含んだ宗教施設が作られるということは他の大規模商業施設の無計画な追随を招くとされ、かわりに隣接する古くからの商業地であるフランツ・レンツェ広場Franz Lenze Platzを中心とした総合的な地域開発が求められる、という論理である。これを根拠に、SPDの地域代表は、「礼拝所に反対しているわけではない」としているが、CDUを中心とした超党派的な批判は、その規模と、多くが「寄宿舎 (Internat) 」に使用されるということに論点があった。

翌4月には、市議会の諸党派は疑念を持っているが、市当局が、「裁量の余地無く」VIKZに許可請求権があると結論をくだしたとの報道があった。これを地域社会への「押し付け」であり、「官僚的思考」であるとして地域代表が反発しているという。この記事には、トルコ系の商店とともに少なくとも2つのディスカウントショップが入る計画によって「フランツ・レンツェ広場商店街は死ぬ」とのCDU地域代表の見解と、緑の党の市議会議員による「VIKZの社会的に不適切な振る舞いが目立つ」との指摘が記されている。その後6月に、「VIKZが譲歩一商店とモスクが縮小」と題した記事がNRZに掲載された。

「社会的に不適切な振る舞い」とはどのようなことかわからないが、「原理主義的」とレッテルを貼られたVIKZに対する抵抗感が作用していることが推測できる。この経過にはドイツ社会のイスラームに対する不寛容さや、9.11.事件以降目立ってきた、閉鎖的なイスラーム・コミュニティ形成への警戒感があらわれているという見方もできる。その一方で、商業施設の併設することが地元商店街の脅威となるという論理が用いられていることも注目すべきである。これには、宗教施設への直接の攻撃を避けるレトリックという側面も感じられる。同時に、移民の社会統合へと社会的合意が向かう中で、イスラーム団体にも社会の一部として地元への配慮と調和が求められているともいえる。それら

双方が含まれるのが「並行社会」に関する議論の特徴である。

さて、ここでは、施設に60人規模の「寄宿舎」が組み込まれていることが問題のひとつとなっている。この他にも、ヴァルスムから3キロ余り東南のオーバーマルクスローObermarxloh地区でも50人収容の「寄宿舎」を併設するIKZの新築計画がある。こちらは2006年の段階で建築申請がなされ基礎は着工されているが、市議会で「寄宿舎」の併設に関して疑問が呈され、建築許可がおりず中断していた<sup>19</sup>。「寄宿舎」は、「密室」でイスラームの理念に基づいた教育をなすことで閉じたコミュニティを形成し、「並行社会」を助長、摩擦の温床となる、というイメージがあるようだ。しかし、オーバーマルクスローのことを伝える2006年の新聞記事には、すでにホッホフェルトにVIKZの「寄宿舎」が存在し、「問題なく」運営されていることが記されている。次に、すでに稼働しているその「寄宿舎」について、経緯を追う。

### 3. 「イスラーム寄宿舎」をめぐる経緯

まず2002年3月のWAZに、マイデリッヒMeiderich市区で、放課後をIKZで過ごし、時には起居する子供たちがおり、学校や管区役場が問題視していると書かれている<sup>20</sup>。こうした記事が散見された後、4月30日のWAZに、「ムスリムたちは対話を中止する」という厳しいタイトルの記事が掲載された。副題は、「イスラーム文化センター連合が寄宿舎を計画一目的は隔離」である。VIKZがデュースブルクに3ヶ所の寄宿舎を設置する計画を持っていることを、市の青年援助委員であるディアコニーDiakonie（プロテスタント系団体）の牧師が明かし、「これまで開放的であったこの連合が変化し、公的なコントロールから逃れようとしている。我々との対話は中止された」と述べたという。また、市青年局長からは、文書で禁止通告したにもかかわらず、VIKZの施設で起居する子供や若者がおり彼らの行動が変化していること、VIKZがホッホフェルト通り沿いの建物を寄宿舎に改築する意向を持っていること、青年局は

州に援助を仰いで対応する予定であるといった報告があったという。記事は、VIKZの見解として、寄宿舎の目的は「非ムスリム住民からの隔離」であるとし、また「政治家の情報」として、統合に向けたものではない教育が行われると記している。そして、政治家たちが「デュースブルクに住むムスリムの一部との対話に危機」を抱いているという<sup>21</sup>。

VIKZが寄宿舎の設立に力を入れるようになった背景には、トルコでの状況変化がある。1959年にスレイマン・ヒルミー・チュナハンが死去して以降、実質的な指導者であった養子のケマル・カチャル Kemal Kaçar が、2000年に死去した。その跡を継いだのは、スレイマンの孫、アフメド・アリフ・デニズオルゲン Ahmed Arif Denizolgun である。その後すぐ、VIKZの方向性が変質した。アフメド・アリフは、「ヨーロッパのトルコの子ども達の魂を奪回する」と宣言し、イスラーム寄宿舎の設立に重点を移した。と同時に、ヨーロッパ社会との「対話」は優先事項から外れた。子ども達は、「ヨーロッパ」の悪い影響から守られるべきとされ、社会への関与は薄くなったという (Jonker 2005, 174)。このような経緯から考えると、この時点でIKZの動きに対して周辺社会が、「対話への不安」を抱いたというのは、根拠のあることであるといえる。しかし、その後の経緯は予想とは違った様相を見せる。

さて、5月25日になって、NRZに、「イスラーム寄宿舎 (Islamisches Internat) を計画」と題した記事が掲載された<sup>22</sup>。副題には「学校：VIKZの申請を受けて、ラインランド地域連盟 Landschaftsverband Rheinland (以下LVR) が現在、ホッフフェルトでのトルコ系青少年のための“生徒寮 (Schülerwohnheim)” の建設について審査している」とある。この記事での寄宿舎計画は、4月の記事のニュアンスとはかなり異なった内容になる。設立の目的は「トルコ語によるイスラーム教育によって、ドイツ社会から隔離すること」ではなく、「言語的職業的な統合」であるとされる。12歳から18歳のトルコ系の生徒達30名ほどが週日を寮で寝泊りし、放課後にはドイツ語クラスと補修クラスを受け

るという計画である。LVRと市の青年局による視察も既に済ませており、よい感触を得ていると記されている。

VIKZホッフフェルトのスポークスマン、シムシェク Şimşek 氏<sup>23</sup>によれば、「ドイツ社会への言語的、職業的、感情的な統合」の支援が目的であり、宗教的な教育は週末に自由参加で行うのみである。いつでも帰宅することができ、寮は家庭教育を「代替するのではなく、支援するだけ」である。「多くのトルコ人の親達は様々な理由で、学校や職業に関して子供達によいスタートを切らせてやれない状況にある。だから大きな需要がある」という。2、3名の資格をもった教育者が運営し、ホッフフェルトの学校や団体と協力関係を構築する。公的助成金は受けない予定である。そして、軌道に乗ったら2番目の寮をマイデリッヒに開設する予定である、とされた<sup>24</sup>。

これに対して、6月には、「ムスリム寄宿寮が懸念を引き起こす—CDUが情報を請求—」という記事が出ている<sup>25</sup>。ヴァルスムの学校に勤める教師が、5年生だけで少なくとも20人の児童が申告された「イスラーム寄宿舎」で週末を過ごすことになり、そのような状況は、ドイツ語を話す機会や能力の妨げになるとして、市議会のCDU会派に働きかけたという。CDUは、近々開かれる「移入と統合評議会」(外国人議会)の「学校および青年支援委員会」に、教育学の理念を援用しているのか、管理機構が存在するのかなどを質問する予定である。また、両親による教育義務の放棄につながるという批判も生じていた。

「DİTİB (トルコ政府系のイスラーム団体連合。注2参照。) がイスラーム寄宿舎に反対—トルコ系団体が透明性を支持—」という記事も見える。DİTİBデュースブルクは、寄宿舎設立をしようとしているのは、ムスリムの中の少数派であるとし、子供の教育は学校を中心として、両親やイスラーム団体の協力のもと行うべきであり、類似した関心から学校教育に取り組むことでデュースブルクの未来を作っていく、と主張する。その一方、「宗教教育は全ての人間の重要な欲求である」が、それぞれの組織は

「透明性を保つように留意するべきである」としている。そして、「イスラームには、専門的に妥当かつ教育上合理的な仲介者が必要で」あり、それ故にDİTİBはドイツ語によるイスラーム宗教教育の学校教育への導入を訴えていると結んでいる<sup>26</sup>。

しばらく空いて9月には、「全ての議員団がイスラーム寄宿舎を阻止しようとしている」との記事が出ている。記事によれば、CDUだけでなく、SPD、緑の党が同様にイスラーム寄宿舎の設立を認めないように青年援助委員会に要請したという<sup>27</sup>。

このような批判をよそに、翌2003年の2月には、「イスラーム寄宿舎」が所轄官庁から一定の条件で認可となることが報じられた<sup>28</sup>。NRZのインタビューに対し、市社会局長は、「我々にはこれを妨げる法的根拠はない」と発言した。事業認可は、市の青年局ではなく、ケルンの州青年局が下し、諸条件の整備を行っているという。

大半がトルコ系でホッフフェルト在住の12歳から18歳の青年達が、次学期から週日は「寄宿舎」から学校に通い、週末は親元に帰るか、自由意志でイスラーム教育を受けることになる、との説明が、「移入と統合評議会」の「学校および青年支援委員会」でVIKZ側のスポークスマンからされたが、政治家や教会、地域の有力者などから強い懐疑と拒否の意見にさらされたという。SPDの市議会議員は「文化間の共存が制限される」と言い、ディアコニーからも、補習授業やドイツ語クラスに寄宿舎という形式が必要なかと指摘があった。「移入と統合委員会」からも反対の意見表明があった。議論の核心は、VIKZがこのプロジェクトを公的な監視のもとに置くことを受け入れるかという問題に至ったが、委員会が受け取った返答は満足が行くものでなかったという。多くはトルコ系の移民と市議会議員などで構成されている「移入と統合評議会」がそのような反応であったということは、先のDİTİBの見解と併せて、トルコ系移民内部にも懸念があったといえ、そこにイスラーム団体同士のヘゲモニー争いを読み取ることも可能である。

7月にも、市民イニシアチブや、緑の党の青年政策スポークスマン（トルコ系）による批判を紹介した記事が登場する<sup>29</sup>。その数日後、今度は「“共存のためのチャンスでもあるかもしれない”」と題した記事が現れる<sup>30</sup>。緑の党の州青年局担当官によれば、2002年3月の申請以来、広範囲の審査がなされ、内務省、憲法擁護庁、警察庁と協議し、イスラーム関連の団体などからも情報を得た、という。そして、この団体が「保守的、中央集権的かつ非政治的」であり、「監視下に置かれていない」と理解した、という。しかし、「親も子も余暇プログラムに参加すること、日常語としてドイツ語を使うこと、全ての関係者が定期的に円卓会議に参加すること」、といった取り決めを条件に認可が下りる予定である、という。これを法的に阻止することはできず、そのような議論を続けるのは不毛であるというのである。そして、「共存のためのチャンスでもあるかもしれない。我々はコミュニケーションの道筋に立っているのだ」としている。SPDの市会議員も、「拒絶しても何も進まない。私達は今後のプロセスに建設的に寄り添うべきだ」と述べている。ここでは、この「問題」を前向きに受け止め、対話の糸口にしようという論調が見受けられ、受け止める側の地域社会の揺れ動きが見てとれる。

翌日のNRZも、「団体が規則を守るならば」と題して、混迷する状況を報告している<sup>31</sup>。デュースブルク・カトリック教会のイスラーム担当委員が「このような施設は間違いなく統合に寄与しないし」「政治的に胡散臭い」と強く批判していることも紹介している。一方で、南教区の教区監督は、「団体が規則を守るならば、生徒寮に問題はない」と発言している。CDU会派は、決定通知の日を「デュースブルクの暗黒の日」と宣言し、「統合の代わりに隔離を経験する」としている。

その2週間後のWAZには、「成功への3角形—ホッフフェルトでVIKZの新しい生徒寮がまもなくスタートする」と題して、その内部写真が公開されている。書き出しには、「中庭で子供達が遊び、室内ではまもなく夏休みを迎える20人ほどの少年達が本を読んだり、勉強したり、



小声で話したり、コンピューターで作業したりしている。まったく普通の金曜日の午後がホッホフェルトのVIKZにあった」と記されている。支配人のシムシェク氏は、様々な批判に対して、「VIKZは30年間ドイツのムスリムに奉仕しており、統合以外の選択肢はない、“なぜなら我々はここで生きて決めているから”である」、と強調している。寮は対話をサポートし、「高度な統合」を可能にするという。「“私達は知識と自負心を伝えたい。家族だけでは伝えられない”」としている。イマームは、週日をここで過ごす理由として、規則正しい生活を身に付けることを挙げる。トルコ人の親はあまり時間を管理したりしないので、学校で寝込んでしまう子供が多いのだという。このイマームは、寮の意義を、教師、子供、親で作る「黄金の3角形」と表現し、それによって子供たちに成功を得させる、としている。

10月になって再びいくつかの批判的な談話がRPに掲載されたが<sup>32</sup>、結局この「寄宿舎プロジェクト」は批判を受けながらも動き出した。そして、1年半後の2005年の4月、再びこの話題が新聞紙上に現れる。「VIKZが二つ目の寮を望んでいる」というものである<sup>33</sup>。その導入部には「ホッホフェルトの生徒寮の2年間にわたる問題のない運営の後、団体はマイデリッヒに二つ目の寮を開きたいとしている」と書かれており、その間「寄宿舎プロジェクト」は地域社会とうまくやってきたことがうかがわれる。記事は、「不信の2年間、11歳から16歳の30人の少年達に毎日補習やドイツ語クラス、居住、睡眠、礼拝などのサービスを提供してきた、ホッホフェルト通りの生徒寮は、ドイツ側においては、この論議を呼んだテーマに外見上の静寂をもたらした」、と記す。青年局長は、寮の責任者について、「協力的である」と述べ、「隔離」などではなく、不安視されていた青年支援関係機関への施設公開も行われ、条件であった「円卓会議」も問題なく機能していると報告している。

翌5月には、「イスラーム寮が開く」と題して、「偏見に立ち向かい、自己紹介するための」4日間の内部公開が行われたことが報じられた<sup>34</sup>。記事は、女子生徒を受け入れていない

ことをやや皮肉っぽく記す以外は好意的に記述されている。宗教教育は週末のみ自由意志での参加であり、信仰は強要されず、補習など提供されるサービスは豊富である、と「ドイツ人でキリスト教徒の」寮長からの説明が記されている。寮での教育はこの寮長とトルコ系の教育者の2名で行われている。日曜日には市長が訪問し、非常に歓迎され、寮生の中にはサインをねだった者もいたという。市長はゲストブックに、「我々はさらに共存の道—デュースブルクでの統合努力—を歩んでいきます。」と記した。記事の最後はこのように締められている。「緑の壁の背後に悪があることを想定する疑念の人々に、市長が忠告することは何であろうか？ “聞いたことだけを信じるのではなく、ここで見たものを信じよう”」。この記事を見る限りでは、1年半の実績によって、地域社会の疑念は薄らいだように見受けられる。また、2004年の移民法制定から本格的に「移民国」を志向し始めたドイツ社会の変化と、そのモデル都市たらんとして統合施策を重視する市長の思惑を見てとることも可能である。

くだって2008年5月、今度はRPにこの年の内部公開の記事が掲載されている<sup>35</sup>。こちらは皮肉っぽく「見張られた扉の日」などを見出しがつけられているところには、保守系のこの新聞のとる立場が反映されている。導入部には「ホストは、まったく問題なく大人になり、その**信仰心**（太字原典）を育んだ若者達について報告した」と記されている。また、入り口でゲストブックに署名の上グループツアーでの見学となり、カメラマンには写真使用に一定の制限を加える契約が求められたとして、「扉はすべて開いてはいない」と記されている。この時点では12歳から19歳の26人の若者が生活していた。2人の「移民出身でないドイツ人」の教育者と、2人の「トルコ系ドイツ人」の補助教育者、他に非常勤の職員がいる。月々の親の負担は150ユーロであった。全体の記述は文化的な違和感を表明しつつも、寮の活動自体は特に当初目的からの逸脱はなく、成功していることを認めている。このような施設を「並行社会の温床」と見るか、「統合の資本」と捉えるかは、周囲の

捉え方次第とも思えてくる。少なくとも、議論の経過と実情を見てくると、現時点では社会的多様性の範囲で捉えられていると見てよいだろう。

#### 4. 「イスラーム寄宿舎」の現在

現在、ホッフフェルトの「イスラーム寄宿舎」は、地域社会の一定の理解、あるいは注視のもとで、「統合の資本」としての役割を担おうとしているように見える。一般には「イスラーム寄宿舎」と呼び習わされ、また、当事者や近い人々は、単に「生徒寮」と呼んでいる。この施設を運営する組織の正式の名称は、「ホッフフェルト統合・文化・教育センター Hochfelder Integrations-, Kultur- und Bildungszentrum e.V.」である。この団体は独立した登録団体であるが、VIKZの傘下にある。筆者は、2009年9月、ラマダン月のさなかに市長以下関係者を招いて行われた、日没後の共食に参加した。この日の一連の出来事から、この地域における「寄宿舎」の現在の立場を垣間見ることができた。

この行事は、デュースブルク市長以下、青年局長をはじめとする市青年局の職員、市会議員、統合評議会議長、同議員、労働者福祉協会（AWO）の地域代表、移住家族の子供たちと青少年の支援のための地域作業機関（RAA）代表、デュースブルク開発会社の文化事業担当者など、トルコ系移民およびトルコ国籍者を含む多くの客を招いて行われた。招待客は最初に寮の共用部分を見学したあと、集会室に案内され、寮生全員と対面して挨拶と自己紹介を行った。

「寄宿舎」の代表を務めるウチャルUçar氏は、自己紹介によれば35歳、社会教育学士であり、その資格と経験を生かして、「寄宿舎」の若者達の教育に従事しているとのことである。ホッフフェルトにはVIKZ関連の施設が4箇所ある。宗教関連の施設が2箇所と、6歳～12歳の児童と家族を対象に勉強とレクリエーションの場を提供する児童・家族センター（Kinder-Familienzentrum）と、この「寄宿舎」である。ウチャル氏は、これらの施設全体を統括する教区長（Gemeindeleiter）であると自己紹介をし

た。

この時点で、「寄宿舎」には31人の若者達が起居していた。ウチャル氏を含めて5名の教育スタッフが彼らの面倒を見ている。うち3名はトルコ系（国籍は不明）、2名はドイツ人である。その他に、厨房係や掃除などのスタッフがおり、彼らの多くはトルコ系である。

パンフレットには、「目的と使命」として、「ホッフフェルト学生寮では、週日に12才から18才の生徒を指導している。通学先は専ら公立学校であり、全ての公的な種別の学校に対応している。生徒達は学生寮から学校に通い、昼食後には、ドイツ語による宿題補助と学習補助を受けている。」「宿題が済むと、余暇プログラムが行われる。スポーツ、遠足、演劇鑑賞、プロテスタント教会などの宗教施設訪問など。」と記されている。その他、「実生活領域での援助、例えば公的な手続きなど」「就職活動の補助（インターン、職業教育）」「合理的なメディア利用（インターネット、テレビ、印刷メディア）」といった項目のサービスが提供されているという。

公開された2008-2009年期の活動記録に見られる行事は、スポーツや文化関連のもの他、地域との交流、多文化間交流、宗教間の対話などといった多岐にわたる。教育的配慮がうかがわれるとともに、宗教間の相互理解や社会的統合といったテーマへの配慮も見受けられる。これらを見る限りでは、対話を阻害するといった初期の批判が的を得たものであったとは言えないだろう。生徒達の自己紹介でもアビトゥア Abitur（大学入学資格試験）を目指しているという者が多かった。「寄宿舎」運営の目的は宗教教育でなく、学業成就による社会的統合にあるというVIKZの説明を裏付ける内容が語られる。ウチャル氏は、これまでの成果と基本姿勢を強調していた。

その後、食堂に移動し、断食や5行について説明があり、アザーン（礼拝呼びかけ）の披露があった後、会食となった。

この「寄宿舎」で起居する学生達4名に話を聞くことができた。トルコ系の若者達の一部に

は、濃厚な家族関係の中で育つせいもあってか、10代のうちは妙に幼い印象をうける者が少ない。ここにいる生徒達はそのようなタイプが多いという印象である。

○F. A. 16才

ここで生活するようになって2年。兄2人がこの出身で、2人ともアビトゥアに受かった。兄のひとりとは大学に行っており、ひとは兵役替わりの社会活動として、この寮の手伝いをしている。

自分も同じようにアビトゥアに受かりたいので自分で希望してここに来た。ここに来る前は成績がよくなかった。自分は家にいると勉強ができない。退屈になって外へ出かけて、友達と街をうろうろしたりしてしまう。ここにいれば周りの友達もみんな勉強しているし、自分も集中して勉強でき、いい影響を与えている。実際に成績がぐっと上がった。大学に行って経済の勉強をしようと思っている。

○E. K. 18才

ここに住んで4年で、生徒代表を務めている。ここに来ることは自分で決めた。もともと友達がここに住んでいた。その友達に、「勉強を教えてください。みんなまじめに取り組んでいる」と聞いた。何度か遊びにきたこともあって、ここに住んだら自分も勉強ができると思った。ここに来る以前はあまり成績がよくならなかったし、自分でもどうしたらいいかわからなかった。

アビトゥアの合格を目指している。大学では電機関係の勉強をしたいと思っている。普通科高校に行ければよかったけども、自分は総合学校に通っている。資格の上では一緒だけど、総合学校からアビトゥアに受かるのは容易でない。学校での勉強の進度やレベルに差がつくので。だから望んでここに来た。ここでは自分の部屋が与えられて、落ち着いて勉強をすることができる。家でも部屋がないわけではないけど。

家はラインハウゼン（デュースブルク市内）。ここからライン川の橋を渡って10分くらいだから遠くはない。毎週末、家に帰っている。（ここでの生活のために）月100ユーロくらい払っ

ている。食費など全て入っている。

○E. A. 17才

ここに住んで1年。大学に行って税理士になりたい。父に勧められて来た。デュースブルク市内出身。

○S. Y. 17才

家族に勧められて来た。ここに来て1年たった。経済を勉強したい。デュースブルクに隣接するディンスラーケンDinslaken出身。

彼らの説明は「寄宿舎」側がアピールしたい内容に沿ったものであろう。しかし、彼らはドイツの業績社会において、学業を通して成功を目指しており、それを後押しすることは社会的経済的機会均等を目指す「統合」支援の活動として、理にかなったものでもある。

会食の間にデュースブルク市長からの挨拶があった。市長は、サッカーを通じて自分も含む他の人々と寮生の交流があることを語り、「寄宿舎」が、青年局とも連携して統合のための重要な役割を果たしているとの評価を述べた。また、「国際的で色彩豊かな都市」であるデュースブルクは、統合の分野で「積極的な評価を受け注目をされている」と述べ、「寄宿舎」は「一緒にひとつのビジョンを描いている」として期待を表明した。また、デュースブルクの「他の場所には大きな問題がある<sup>36</sup>」ため、家から離れて「寄宿舎」から学校へ通うという生徒達の選択には一定の意義があると理解を示した。市と「寄宿舎」の教育の分野での連携を期待し、何かあれば市とコンタクトを取って欲しいとも述べた。

また、青年局の代表も、「寄宿舎」が、生徒達に有意義なサービスを提供しているとの評価を述べた。さらに、別の青年局の担当者は当日の友好的な雰囲気とイスラーム文化の興味深さに触れるとともに、ウチャル氏がバイエルン風の挨拶「神に挨拶を（Grüß Gott）」を用いることを指摘して、「神（Gott）とアッラーは同じ存在だ」と述べて友好をアピールした。RAAの代表者も、「寄宿舎」の生徒達の学業面での成果について積極的な見解を示した。これら、市「当局」側の見解を見ると、招待の場である

ということを差し引いて考えても「寄宿舍」の目的を理解し成果を評価している様子がうかがえた。

## 5. おわりに

ウルジャミーが設置された黎明期から、寄宿舍問題に至る経緯を見ると、イスラーム団体は、初期においては「ガストアルバイター」の宗教的実践に寄与するものとしての機能を担い、周辺社会にも素朴な好意によって受け入れられたが、「ガストアルバイター」が移民として社会に定着し、その存在の承認を求めにつれ、社会に文化的異物を持ち込むものとして問題視されるようになった経緯が見てとれる。

統合がテーマになった現在では、統合に資するための資源として地域に貢献することが求められ、その役割が一定の評価を得るようになっている。統合とは移民が社会経済的に自立し社会的地位を確保することであり、そのために重要なのは教育である。VIKZはこの面に貢献する姿勢を明示することで、「原理主義」「神秘主義」というイメージを払拭することに成功した。これは、産業構造の変化の中で基幹産業である鉄鋼業が頭打ちになったデュースブルク市が、今後の活路を模索する中で移民の活力を利用する方向に活路を見出そうとしていることも影響している。状況の変化は移民と地域双方の変化によるものである。

一方で、「寄宿舍」建設反対をめぐる議論の迷走には、文化的権利の容認が多文化主義的隔離を生み、ムスリムによる自前のインフラ構築が「並行社会」批判に結びつくという複雑で矛盾する言説形成のプロセスが表れている。地域社会の危惧が深刻であると共に具体的根拠に乏しいことも指摘できる。危惧の源は、VIKZが「保守的」なイスラーム団体であるという言説でしかなく、具体的な「危険性」の根拠は提示されず、活動を阻止する法的根拠もなかった。そこにあるのは、異文化に対する違和感だけでもいえる。「並行社会」という概念はこういった「漠然とした他者への不安」を社会問題化するのに適したものであるが、文化的権利の主張と表裏の関係をなし、アイデンティティ・ポリ

ティクスを強化する効果をもつものであるといえる。文化的統合の難しさという言説は、このような曖昧な根拠に立ったものでもある。

現在行われている統合政策は、移民の社会参加と機会均等を中心課題にして「並行社会」の解消を目指すものである。「並行社会」の主要な問題は、移民の若者たちが学校教育からドロップアウトすることで構造的なセグリゲーションが生ずることにある。「寄宿舍」の試みは、当初の地域社会の危惧とは裏腹に、若者たちが「問題」に足をとられず社会に統合されるために有効であると評価されたのであろう。文化的閉鎖性への危惧は言説上の問題であり、「寄宿舍」が実績を見せたことで地域社会は実をとり、統合の資源と考えはじめたようにみえる。統合に必要なのは教育の機会であり、スレイマンジュの持つ神秘主義的な路線がもたらす教育重視の姿勢が、結果的にプラスの作用を及ぼし、移民の若年層の社会的達成を促す方向に向かわせているといえる。

このことは、移民と社会との関係が変化する中での、自発的結社が中間集団として担う役割の変化をも示している。中間集団としてのイスラーム団体は、移民定住化の初期段階では文化的実践のための環境整備に「内向きに」寄与したが、定住化が進行するとセグリゲーションの要因としてとられえられ、ホスト社会とのかわりが生まれる中ではコンフリクトも生じさせた。しかし、「寄宿舍」の現状が示すように、その役割は移民個々の社会的統合に寄与する方向に移行し、ホスト社会での文化的多様性を前提とした生活を確立するための媒介としての役割を担うようになっている。

この経過は、イスラーム団体の役割が自文化のためのインフラから統合への寄与に変化する中で、双方の両立が可能であることを示すものであるといえる。ホスト社会も統合を促しながら多様性を資源としようとする姿勢から、この試みを受け入れようとしており、素朴な多文化主義と「並行社会」の結びつきではない、建設的な多文化「共生（Zusammenleben）」の方向性が見出されうることを示唆しているといえよう。

\*本調査は人間文化研究機構連携研究プロジェクト「ユーラシアと日本：交流と表象」の助成を受けて行われた。

注

- 1 ドイツでは統計上「移民の背景を持つもの」というカテゴリーが用いられる。2009年現在のドイツ連邦統計局による統計では、ドイツの人口約8,190万人のうち、「移民の背景を持つもの」が約1,570万人を占める（外国籍は559万人）。
- 2 上部団体の種類や特徴については、(石川 1997) (Lemmen 2002) 等を参照。代表的な上部団体はトルコ政府系のDİTİBであるが、トルコ政府がこれを設立した理由はVIKZなどの団体の勢力伸張を警戒したためといわれる。ヨーロッパのトルコ系移民の状況については、(内藤 1996, 2004) (Erzan, R. & Kirişci, K. 2008) (Faist and Özveren 2004) など。
- 3 VIKZのHPによる ([http://www.vikz.de/info/vikz\\_tr.html](http://www.vikz.de/info/vikz_tr.html)) (2011年11月18日最終閲覧)
- 4 スレイマンの生涯や思想、スレイマンジュの活動については、(Jonker, 2002) に詳しい。
- 5 [http://www.bpb.de/wissen/FX1ZGA,0,0,Ausgew%E4hlte\\_Arbeitslosenquoten.html](http://www.bpb.de/wissen/FX1ZGA,0,0,Ausgew%E4hlte_Arbeitslosenquoten.html) (2011年11月5日最終閲覧)。ただしこれは国籍別の統計であり、ドイツ国籍も含めた「移民」全体の状況ではない。
- 6 「並行社会」の概念については、拙著(石川 2011)、(近藤 2007) (Novak 2006) などを参照。
- 7 「統合」は移民の社会的ステータスの安定を志向する考え方であり、現在のヨーロッパの移民政策の標準となっている。概念について詳しくは(手塚 2004, 5-20)を、ドイツの統合政策の展開については、(近藤 2007, 169-208) (丸尾 2007) を参照。
- 8 デュースブルクの文書館には、ルール地方で発行されている地方紙3紙の記事が、内容ごとに分類されて保存されている。最も

- 古い記事は1950年代のものである。3紙にはそれぞれの政治的立場がある。ライニッシェ・ポスト (ライン新聞: Rheinische Post=RP) は、保守的な内容であり、CDUの支持者が主たる読者層であるとされる。新ルール新聞 (Neue Ruhr Zeitung=NRZ) は最もリベラルであるとされており、SPD支持者の読者が多いとされる。西ドイツ一般新聞 (Westdeutsche Allgemeine Zeitung=WAZ) は中間的な位置づけだが、内容は姉妹紙であるNRZと近い。
- 9 Neue Ruhr Zeitung 23.12.1972
  - 10 Neue Ruhr Zeitung 10.5.1972
  - 11 Neue Ruhr Zeitung 3.10.1973
  - 12 Rheinische Post 18.4.1977 文中にVIKZとの関係は記述がないが、住所からIKZであると判断できる。
  - 13 Westdeutsche Allgemeine Zeitung 24.9.1977
  - 14 Neue Ruhr Zeitung 4.9.1981
  - 15 Stadt Duisburg 1996. *Islam in Duisburg*, p.38.
  - 16 2008年に完成したドームとミナレットを備えた本格的なモスク。DİTİB所属。
  - 17 Rheinische Post 16.9.2006
  - 18 Neue Ruhr Zeitung 8.3.2008
  - 19 Westdeutsche Allgemeine Zeitung 29.6.2006  
その後、2009年に筆者が訪問した際には既に工事が再開しており完成が近いとの話であった。
  - 20 Westdeutsche Allgemeine Zeitung 7.3.2002
  - 21 Westdeutsche Allgemeine Zeitung 30.4.2002
  - 22 Neue Ruhr Zeitung 25.5.2002
  - 23 記事によってSimsek、Semsik、Simsicなどと表記が違うが、正しくはŞimşek
  - 24 同記事には、ムスリム・クリスチャン・活動グループ「共に生きる」を主催するプロテスタント系団体の牧師が「公的なコントロールを離れる」として懸念を示していたが、その懸念は払拭されつつある、とも書かれている。
  - 25 Westdeutsche Allgemeine Zeitung 20.6.2002
  - 26 Westdeutsche Allgemeine Zeitung 26.6.2002
  - 27 Westdeutsche Allgemeine Zeitung 24.9.2002

- 28 Neue Ruhr Zeitung 11.2.2003  
 29 Westdeutsche Allgemeine Zeitung 4.7.2002  
 30 Westdeutsche Allgemeine Zeitung 9.7.2002  
 31 Neue Ruhr Zeitung 10.7.2003  
 32 Rheinische Post 20.10.2003  
 33 Neue Ruhr Zeitung 22.4.2005  
 34 Westdeutsche Allgemeine Zeitung 17.5.2005  
 35 Rheinische Post 29.5.2008  
 36 一般にホッホフェルトではゲームセンターなどに集まる若者たちが多く、ドラッグの取引なども行われる治安の悪い地域であると理解されている。

### 参考文献

- Erzan, R. & Kirişci, K.  
 2008: *Turkish Immigrants in the European Union: Determinants of Immigration and Integration*. New York Routledge.
- Faist, T. and Özveren, E. (eds.)  
 2004: *Transnational Social Spaces : Agents, Networks and Institutions*, Ashgate.
- Gölpınarlı, A.  
 1997: *Türkiye'de Mezhepler ve Tarikatlar*, İstanbul İnkılap.
- Güner, A.  
 1991: *Tarikatlar Ansiklopedisi*, Milliyet.
- Gür, M.  
 1993: *Türkisch-islamische Vereinigungen in der Bundesrepublik Deutschland*, Frankfurt a.M. Brandes & Apsel.
- Hansen, R.  
 2003 "Migration to Europe since 1945: Its History and its Lessons" in Spencer, S. (ed.) *The Politics of Migration: Managing Opportunity, Conflict and Change* pp.25-38, Blackwell.
- Jonker, G.  
 2002: *Eine Wellenlänge zu Gott : Der Islamischen Kulturyentren in Europa*, Bielefeld Transcript.  
 2005: "The Transformation of a Sufi Order into a Lay Community : The Süleymanci Movement in Germany and Beyond" in Cesari, J. et al (eds.) *European Muslims and the Secular State*, Ashgate 169-182.
- Konrad, P.  
 2007: "Muslims in Europe : Demography and Organizations" in Samad Y. et al (eds.) *Islam in the European Union : Transnationalism, Youth and the War on Terror*, Oxford Univ. Press 26-59.
- Lemmen, T.  
 2002: *Islamische Organisationen in Deutschland*, Bonn Friedrich-Ebert-Stiftung.
- Novak, J.  
 2006: *Leitkultur und Parallel Gesellschaft : Argumente wider einen deutschen Mythos*, Frankfurt a.M. Brandes & Apsel.
- Schiffauer, W.  
 2007: "From Exile to Diaspora : the Development of Transnational Islam in Europe" in Al-Azmeh A. et al (eds.) *Islam in Europe : Diversity, Identity and Influence*, Cambridge Univ.Press 68-95.
- Spuler-Stegemann, U.  
 1998: *Muslimen in Deutschland : Nebeneinander oder Miteinander*, Freiburg Herder.
- Stadt Duisburg  
 1996.: *Islam in Duisburg : Soziokulturelle Bestandsaufnahme der Duisburger Moscheevereine*, Stadt Duisburg.  
 Zentrum für Türkeistudien (Hrsg)  
 1994: *Ausländer in der Bundesrepublik Deutschland : Ein Handbuch*, Opladen Leske+Budrich.
- 石川真作  
 1997: 「ドイツにおけるトルコ系イスラーム団体」『史苑』57-2.  
 2011: 「「並行社会」と「主導文化」—移民国化するドイツの社会的統合—」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶ノ水書房.
- 近藤潤三  
 2007: 『移民国としてのドイツ—社会統合と平行社会のゆくえ—』木鐸社.
- 手塚和彰  
 2004: 『外国人労働者研究』信山社.
- 内藤正典  
 1996: 『アッラーのヨーロッパ—移民とイスラーム復興—』東京大学出版会.  
 2004: 『ヨーロッパとイスラーム—共生は可能か—』岩波書店.
- 丸尾眞  
 2007: 「ドイツ移民法における統合コースの現状及び課題」『ESRI Discussion Paper Series』 No.189 内閣府経済社会総合研究所.
- 山本健兒  
 1994: 「ドイツの大都市におけるエスニック・マイノリティーデュースブルクの事例1、2」『経済志林』62巻1号、2号.

*Abstract*

From “Backyard Mosque” to “Center of Integration, Culture, and Education”: Past and Current States of an Islamic Association in a German City

Turkish Islamic Associations could be defined as voluntary associations which contribute to the adaptation of Turkish immigrants to a host society. In this paper, I will examine the changing role of such associations as intermediary groups, following the history of VIKZ, an example of such associations, in a German city -- from the 1970s to today. In the beginning, Islamic associations had developed infrastructures for religious practice of immigrants. However, with the progress of settlement of immigrants, these came to be targets of cultural conflict. At present, however, they are expected to focus on contributing to the integration of immigrants into the host society.

Keywords: Germany, Immigrants from Turkey, Islam, Voluntary Associations, Social Integration, Parallel Society, Ethnicity, Education, Süleymanca